

氏名	ぬきな しゅう 貫名 秀
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	甲第520号
学位授与年月日	平成17年 3月11日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	パニック障害と全般性不安障害に対する内観療法
学位論文審査委員	(主査) 長谷川純一 (副査) 重政千秋 川原隆造

学位論文の内容の要旨

内観療法は本邦で開発された精神療法で、脆弱な自我状態でも保護する治療構造を備えているため適応疾患が広い。現在、神経症、アルコール依存症、遷延性うつ病に関する詳細な検討を行った報告はあるが、不安障害に関する学術的報告は見あたらない。そこで全般性不安障害 (Generalized anxiety disorder:GAD)、パニック障害 (Panic disorder:PD) に対する集中内観の治療効果を検討するために本研究を行った。

方法

対象は1996年4月から2003年6月の間に鳥取大学医学部附属病院精神科・神経科に入院し集中内観を行ったGAD、PD患者28名である。診断はICD10に基づきGAD15名、PD13名、男性15名、女性13名で、平均年齢は 33.3 ± 14.4 歳(18~69歳)であった。

集中内観前後での心理検査は東大式エゴグラム (Tokyo University Egogram:TEG)、絵画欲求不満テスト (Picture-Association Study Assessing Reaction to Frustration:PF-study)、矢田部・ギルフォード性格検査 (Yatabe Guilford Personality Inventory:YGテスト)、STAI日本版(State-Trait Anxiety Inventory:STAI)などを行った。

集中内観開始直前に治療意欲を高めるために内観初日ミーティングを行った。集中内観中は朝9時までは病棟の自室内で内観内容を記録させ、通常9時から内観療法室に移動し16時まで屏風で半畳のスペースに仕切られた空間で内観を行った。この7日間は外部との遮蔽を行い、行動の制限を設けて集中性を高めた。内観療法における回想のテーマは「お世話になったこと、お返しをしたこと、ご迷惑をかけたこと」に限定されている。内観の方法は記憶をたどって自分の過去を事実に基づいて回想していくものである。内観終了後に終了ミーティングを行った。内観終

了後退院までの間に内観前と同じ心理検査を行った。転帰については、集中内観後6ヶ月から1年の間に問診を行い効果を臨床判定した。社会的活動性は内観前と判定時に行った問診により Global Assessment of Functioning Scale (GAF)で評価した。集中内観における転帰の判定について、1) 著効は集中内観後症状の改善と社会適応の可能となった患者、2) 有効は症状の軽度改善と社会適応の軽度改善を認める患者、3) やや有効は症状の改善にいたらなかったものの対人関係、特に家人との関係改善を認めた患者、4) 増悪は症状の増悪や適応障害を来した患者とした。

結 果

- 1) PD、GAD に対する集中内観による治療効果では著効 17 名 (60.7%) で、有効以上が 23 名 (82.1%) と極めて高かった。内観前に比べ判定時に GAF は有意に改善し、増悪した患者はなかった。GAD、PD 群の GAF もそれぞれ有意に増加していた。
- 2) 内観における心理的展開と転帰については、著効群では深い内観を体験した患者が非著効群より有意に多かった。特に配偶者に対して深い内観を体験した患者が著効群に有意に多かったが、父母に対する内観では両群間に有意差を認めなかった。
- 3) 著効群では恩愛感や自己中心性を認めた患者、他者視点に達した患者、我執からの解放に達した患者が非著効群より有意に多かった。
- 4) 投薬量は内観時と判定時の比較で抗うつ薬は有意差はないものの減少しており、ベンゾジアゼピン系薬物の量は有意に少ない量であった。
- 5) 各種心理検査の結果より、STAI では全症例での状態不安 (S-不安)、特性不安 (T-不安) とともに集中内観後有意に減少した。TEG では全症例での大人の自我状態、自由な子供の自我状態が集中内観後有意に増加していた。YG テストでは抑うつ、神経質が集中内観後有意に減少し、一般的活動性と社会的外向が有意な増加を示していた。PF-study については他罰が有意に減少し、無罰は有意に増加していた。

考 察

内観療法は自己と他者の関係性を内観3項目に沿って体験した具体的事実を回想していくものである。過去の特定の人との関係性について他者の視点から見直すことにより新たな意味を見いだす心理療法である。本研究の結果より内観者は内観3項目について具体的事実を回想することで「事実の再認識」を行い、これまでの自己に対する解釈の再検討や世界に対する意味づけの再検討、つまり「解釈・意味づけの再検討」を行い、合理的な認知の獲得に至ったものと考えられる。

今回の心理検査結果を総合すると、抑うつ、神経質が改善し活動性が高まり、合理的な思考の改善により物事を客観的に見ることが可能となる。客観性の獲得により欲求不満場面での考え方が無罰方向に変化し自他を過剰に責めることがなくなり、社会適応性が改善する。この罰の方向の変化は集中内観による合理的な認知の獲得や自己肯定感や問題解決能力の亢進より、自己中心

性による依存攻撃的な病理的变化による事を示唆している。

結 語

集中内観は PD、GAD 患者の治療法として高い有効性を示し、その効果は長期間に持続し、薬物の減量につながる極めて有用な精神療法である。治療効果を高めるためには深い内観を体験することと集中内観後の継続療法が特に重要であると考えられた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は全般性不安障害とパニック障害に対する集中内観の臨床的効果判定ならびに社会的活動性の尺度を用いた転帰の判定と、それに関わる因子について検証したものである。方法としては集中内観前後に心理検査を、集中内観後 6 ヶ月から 1 年の間に問診を行い集中内観による心理的展開と転帰とのかかわりなどについて判定した。その結果、集中内観によって極めて高い治療効果が得られ、社会的活動性の有意な改善と薬物の減量にもつながっていた。著効を呈する性格傾向の存在も見られた。各種心理検査からは不安レベルの低下と精神的健康と心身症状の改善、抑うつ改善、神経質の改善と他罰方向の減少も見られた。これらの結果から集中内観により社会適応性が改善し不安障害に効果を示すものと思われる。本論文の内容は集中内観が全般性不安障害、パニック障害患者の治療法として高い有効性を示し、その効果は長期間に持続する極めて有用な精神療法である事を示唆するものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。